

聖書：士師記 10：1～18

説教題：見るに忍びなく

日時：2014年6月22日

まずこの章にはトラとヤイルという二人の士師が出てきます。彼らの記録は大変短いものとなっています。彼らはエフデ、ギデオン、サムソンといった比較的長く記されている大士師に対して小士師と呼ばれています。士師記には全部で12人の士師が出てきますが、そのうち半分の6人が大士師で、もう半分の6人が小士師です。しかしこれは小士師がより劣った人物であることを意味しません。彼らも主がイスラエルを治めるために立てられた器です。まず一人目のトラはイッサカル人、トドの子プワの息子でエフライムに住んだとあります。エフライムはイスラエルのほぼ中央に位置しますので、トラはイスラエルに広く影響力を持ったと考えられます。彼によって23年間、イスラエルに平和な時代が与えられました。もう一人の士師はギルアデ人ヤイル。彼については30人の息子がいて、30頭のろばに乗り、30の町を持っていたと記されています。おそらく30人の息子たちがめいめいろばに乗り、一つずつ町を治めていたのでしょう。これも彼には大きな力が与えられていて広い影響力を持っていたことを暗示しています。彼の治めた期間は22年で、こちらも比較的長いものです。

このトラとヤイルの記録にはどんな意義があるのでしょうか。それはこれらの記事はイスラエルに対する主の真実を示しているということです。1節に「さて、アビメレクの後」とあります。前回私たちはアビメレクとシェケムの人々がもたらした混乱ぶりを見ました。彼らは主を心に留めず、大変な災いを自分たちにもたらしました。しかし主はそのようなイスラエルを見捨てず、なおも彼らをあわれみ、彼らのためにさばきつかさを立てて、平和な期間を与えて下さったのです。

ところが、またしてもイスラエルは主の目の前に悪を行なったことが6節以降に記されています。今回はこれまでとちょっと違います。6節から分かることは、ここにたくさんの神々の名が列挙されていることです。バアルやアシュタロテ、アラムの神々、シドンの神々、モアブの神々、アモン人の神々、ペリシテ人の神々、…。イスラエルは主のあわれみを良いことに一層の偶像礼拝へと突っ走ったのです。何回か申し上げてきましたように、単なる繰り返しではなく、螺旋階段を下るごとく一層墮落するという歩みです。

ですから、そのような彼らに対する主のさばきもこれまでとちょっと違います。7節に「主の怒りはイスラエルに向かって燃え上がり、彼らをペリシテ人の手とアモン人の手に売り渡された。」とあります。すなわち今回、イスラエルは同時に二つの国々から攻められた。ペリシテ人はイスラエルの南西に位置する人々、またアモン人は東側の人々ですから、イスラエルは東からも西からも同時に攻め込まれたのです。そしてここでは東のアモン人からの圧迫が中心に記されて行きます。8節に「それで彼らはその年、イスラエル人を打ち砕き、苦しめた。」とあります。「打ち砕き」という言葉は激しい言葉です。このため、ヨルダン川の東側のギルアデに住んでいたイスラエル人は18年間苦しめられます。さらに9節にはそのアモン人がヨル

ダン川を渡って、西側のユダ、ベニヤミン、エフライムにまで攻め入ったことが記されています。ここはイスラエルの心臓部です。ここまで攻め入られた時、9節最後にありますように「イスラエルは非常な苦境に立った」。これは彼らが刈り取らなければならなかった報いです。

さて、このような苦境においてイスラエル人は主に向かって叫びます。10節：「そのとき、イスラエル人は主に叫んで言った。『私たちは、あなたに罪を犯しました。私たちの神を捨ててバアルに仕えたのです。』」 私たちはこのイスラエル人の叫びをどう見るべきでしょうか。主はここで彼らの求めを退けています。11節と12節にあるように、主はこれまでいくつもの敵からイスラエルを救って下さいました。しかしその後でイスラエル人はどうしたのでしょうか。13節にありますように、彼らは繰り返し主を捨てて他の神々に仕えました。緊急な時だけ、助けて！と主に叫びますが、助けてもらった後は知らんぷり。苦しくなるとまた主に「助けてください。あなたに従います。」と約束するものの、助け出されるとすぐに主を捨てる。これは主を都合良く利用しているだけです。ですから主は言われるのです。「わたしはこれ以上あなたがたを救わない。あなたがたが選んだ神々に叫んで救ってもらったらどうか。」と。

この主の対応には段階があったことにも私たちは注目すべきでしょう。主はこれまでイスラエルが叫び求めた時は、すぐに聞いて下さいました。オテニエルの時も、エフデの時も、デボラとバラクの時もそうでした。しかし変化が見られたのはギデオンの時です。6章7節でイスラエルが叫んだ時、主はまず預言者を遣わしてイスラエルを責められました。そして彼らに悔い改めを求め、その後でギデオンを士師として立てて下さいました。しかし彼らはその後で、またしても同じように主を捨てました。この経過を受け止めるなら今日の主のお言葉は全く自然であることが分かるのです。主は繰り返し、彼らに忍耐し、警告の言葉を語って来られましたが、それをいつまでも心に留めないで生活するなら、ついにはこのように宣言されるのです。「わたしはもうこれ以上、あなたがたを救わない。」と。

しかし、イスラエルはなお、主に懇願します。15節：「すると、イスラエル人は主に言った。『私たちは罪を犯しました。あなたがよいと思われることを何でも私たちにしてください。ただ、どうか、きょう、私たちを救い出してください。』」 この彼らの悔い改めは真摯なものであったと言うべきでしょうか。彼らは自分たちの罪を告白し、主の前にへりくだって服従の姿勢を示しています。しかし必死な時、私たちは何でもするでしょう。とにかく今、助けて欲しいと思う時は、どんなことでも言い、へりくだった言葉も発するでしょう。16節には「自分たちのうちから外国の神々を取り去った」とあります。ここに彼らの真剣さが現れているようにも見えます。しかしこれまでもそうして来たのではなかったでしょうか。これらを保ったままでは主に懇願できないので、確かにここでは捨てました。しかし助けられたらまた他の神々に仕えるのではないのでしょうか。これは彼らのルーティーンなのではないのでしょうか。そして15節は一見、謙遜な懇願に見えますが、結局最後に「ただ、どうか、きょう、私たちを救い出してください。」と言っています。色々述べつつ、今すぐ救い出してくれることを要求しています。つまり彼らはここでも、今すぐ救い出してもらうために神を操作しようとしているだけなのではないのでしょうか。

ですから、私たちは次を正しく読まなければなりません。16 節後半に「主は、イスラエルの苦しみを見るに忍びなくなった。」と書かれています。私たちは「イスラエルが真剣に悔い改めたので、主はその姿を見て忍びなくなった」と読んでしまいやすい。しかしそうではないのです。彼らの悔い改めは、どこまでのものか分かりません。主はもうこのような悔い改めの言葉を、「わたしは聞き飽きた。あなたがたのそのような言葉は何の当てにもならない。」と言って見捨てても良いのです。主が心を動かしたのは、彼らが悔い改めたからではなく、彼らの「苦しみを見た」からだというのが、この 16 節後半が語っているメッセージでしょう。

イスラエルの苦しみは自業自得の苦しみです。主はもう「そんなあなたがたのことなど知らない」と言って、目をそむけてしまわれてもおかしくなかった。ところが主はなおも彼らを見つめてくださったのです。そしてその姿を見て、忍びないという思いを持ってくださったのです。思い巡らすべきは、「忍びなくなった」という主のお心です。主はただ忍耐しているだけでなく、私たちの苦しみを見てご自身が苦しい思いをしておられる。主は決して高いさばきの座から、冷たい視線を投げかけているのではないのです。ご自分は安楽椅子に座りながら、どうしようもない奴だと冷ややかに私たちを眺めているのではない。何と苦しみにある私たちを見て、聖なる神がいたたまれない思いになっておられる。イザヤ書 63 章 9 節：「彼らが苦しむ時には、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」

そして、主はただ「忍びない」と思うだけで手をこまねいているのではなく、私たちのために行動して下さる方です。主はイスラエルのために次の士師エフタを立てようとされます。今日の章の 17 節 18 節はその準備となる部分です。このような主がいてくださることこそ、私たちにとっての希望です。もちろん私たちはこのことを罪の生活を続ける励ましにしてはなりません。まるで主のさばきはいつまでも来ないかのように考えてはなりません。聖書ははっきりと最後のさばきはあると語っています。また私たちの受けた恵みが大きければ大きいほど、それを軽んじた者には一層のさばきが臨むと言われています。ですから私たちはこの主の姿を軽く受け流すのではなく、しっかり仰ぎたいのです。そこから私たちのふさわしい応答を導かれて行きたいのです。

最後に、二つのことを短く述べて、今日の箇所のとめとしたいと思います。一つは、私たちの今日の生活も、この主の深いあわれみと忍耐の上に成り立っていることを思っただけで見るべきではないかということです。士師記の時代のイスラエル人ばかりでなく、私たちも果たして何度、「悔い改めます。主に従います。」と約束しながら、状況が改善すると、たやすく主を忘れ、約束を反故にして、勝手な道を歩んで来た者でしょうか。そうして主を都合良く利用し、また操作して来たような者でしょうか。そんな私たちはたとい今、大きな問題がなく、無事平穏な日々を過ごすことができているとしても、決して自分は今日の箇所のイスラエル人とは違うかのように胸を張ることはできません。むしろ今日の私を支えてくださっている神のあわれみと忍耐を思っただけで主を礼拝すべきではないでしょうか。そしてこれ以上、神の心を煩わせ、神に苦

しい思いをさせることがないように、そのお心に応答する歩みを祈り求めて行くべきではないでしょうか。

そしてもう一つは、もし私たちが今、苦しみのただ中にあるなら、ここに示されている主のお姿から慰めと導きを受けたいということです。私たちも様々な苦しみにあえぐ時があります。そこから抜け出せない時があります。もちろん苦しみはすべてその人の罪の結果なのではないことは知りつつも、自らの不甲斐なさを知る私たちは、私のあの罪、この罪のために、この報いを刈り取っているのだなあ～と思わざるを得ないところがあります。しかし主はそんな私たちを見捨てておられるのではない。実は私よりも深いうめきをもって、私を今日も見つめ続けていてくださるのです。そして何とか救いに導かんとして、共に歩んでくださっているのです。主がそのように今日の私をも見ていてくださると知るところから、私たちのこの「主に対する歩み」を導かれて行きたいと思います。自分を見る限り、望みはどこにもない。周りの状況を見る限り、どこにも望みはない。しかしこのような主が天におられて、すべてをご支配くださっていることこそ、私たちの望みです。この主を仰いで賛美し、主の御言葉に聞き、主に祈り、主に従う歩みへ立ち上がらせていただき、主が切り開いて与えてくださる祝福の歩みへ導かれて行きたいと思います。